

# ソウルの旅の記録

記録：鶴沢 希伊子

期間 2006年5月11日～5月14日

参加者 石川康子、鶴沢希伊子、大野哲夫、大村哲夫、加藤由美子、小島崇志、近田三男、鈴木彰、  
任海千衛、任海ユリ、箱田紘子、丸山重威、三宅征子、むらき数子、森川檀弘、計15人

## 第1日 東京 雨曇雨

出発 西調布5:51 つつじヶ丘6:00 新宿6:20 日暮里6:50着 改札口で切符が買い難く、  
スカイライナー6:53に乘れず、特急7:07に乘車。成田第一ターミナル着8:24!

別働隊 ①調布発5:42 新宿6:33の成田エクスプレスで。②調布駅北口発5:30ハイウェイバスで。  
集合 北ウイング4階E32。大韓航空 KE-706 9:30出発。機内食が10:00に出る。  
仁川(インチョン)空港着11:51(2時間21分)。韓国は晴天。

すぐバスに乘車、ハンギョレ新聞社に向かう。これから4日間ハンナラ観光のお世話になる。

ガイド:李南淑(イ・ナムスク)さん、ドライバー:金(キム)さん、カメラマン:ホンさん

### \*ハンギョレ新聞社訪問

ハンギョレとは「1つの民族」という意味。「ハンギョレ新聞社」の設立まで、新聞社の組織、労働組合の役割、韓国ジャーナリズムが抱える問題などについて説明を受け、質疑する。

昼食 遅い昼食となる。

### \*安重根(アンジュンゲン)義士記念館参観

### \*西大門刑務所(ソデムンヒョンムソ)歴史観参観

夕食 韓一会館。カルビ・骨付牛肉を鉄で切り、炭火焼きにする。飯だこの活き造りなど。

ホテル:ホリデイ・イン・ソウルに宿泊。15人全員10階。夜ホテル周辺を散策の人多し。

韓国第一夜を、快適に寝る。

## 第2日 曇、気温最高20度C

朝食 ホテルにて イタリアンレストラン(ビュッフェスタイル)

韓国風レストラン(欧、和、韓風朝食定食)

ロビー集合、8:30。出発9:00、ロッテホテルへ。

ロッテホテル前から板門店ツアーバスに乗り替え。ハンナラ観光のガイドは乗車せず。

外国人と一緒にの旅となる。大韓板門店ツアー(DPJ)ガイド金慶美(キムキョンミ 女性)さん

漢江に沿っての道。スパイ予防の二重コイル鉄線を張り巡らした道路を行く。

途中、南北分断の歴史、韓国国内での最近の問題、脱北者の状態、北朝鮮の状況などの説明を聴く。

### \*烏頭山(オドゥサン)統一展望台参観

北朝鮮の生活。脱北者女性2名の体験談など展示をみながら説明をうける。北朝鮮一望。

昼食 一般レストランでプルコギ。

ガイドの金(キム)さんが「けっしてアルコール類を飲まないように」と再三注意していたがここには何でも売っていた。ここまでは韓国の人々も大勢観光に来るらしい。

再びバス。休戦ライン248km、軍事分断線を行く。非武装地帯とは名のみ。道の両側は地雷原の武装地帯

の由。再び細かい注意を受ける。自由の橋をみる。統一の村、統一路を通る。二度パスポート検閲。

国連軍軍人ロジャース乗車。

### \*板門店(バンムンジョム)見学

自由の家。本会議場。第三警戒署。帰らざる橋。キャンプポニパス。高麗人参産地を通る。北朝鮮土産物販売所に立ち寄る。17:20、ロッテホテルに帰着。

17:30 高級ホテル名店街の免税店に案内されたが、誰1人買い物することなく早々に引き上げる。

その後タプコル公園に向かうが、閉園寸前に到着したため、明日再訪とし、ホテルに戻る。

夕食 コリアハウスで韓国伝統的宮廷料理・伝統舞踊鑑賞する7人と、庶民的居酒屋探訪をしたい8人とに分かれて撮る事となる。

### 第3日 高曇り

朝食 ホテルにて、前日同様。8:45、ロビー集合。9:00ホテル出発。

#### \*独立記念館見学

時代毎に展示した歴史館8館。朝から弁当持参で一日参観する必要がある程、内容が濃い。国民の醸金により設立という点が素晴らしい。

昼食 「釜飯」というので、日本の釜飯を連想していたところ、大きな釜で炊いたご飯を茶碗に盛りつけたもの。おかずには韓国風常備菜の様な、菜っぱの煮物、和え物、漬物、海鮮風佃煮の様な物が十数種並ぶ。これをごはんに乗せて食す。おつゆ状の物が出てきたのでスープかと思いきや、かつて日本でも釜で飯を炊いた折、おこげが出来るとお湯を入れ沸かして、おこげをこそげ取り、このお湯を飲んだもの。それと同じ、おこげ一片がが入った釜肌を洗ったお湯だった。これに常備菜を入れ、味つけして飲む。まさに「勿体ない」に相応しい食べ物。何か懐かしく昔を思い出す。

#### \*柳寛順(ユガンスン)生家訪問

昔ながらの萱葺き屋根、小じんまりした農家。17才の純粋な少女の心根、写真の眼が忘れられず。

#### \*タブゴル公園(92年までパゴダ公園)見学 17:00

円覚寺跡 十層石塔(国宝第2号)、大円覚寺碑、八角亭、3・1運動記念レリーフ10枚。

3.1独立宣言記念塔。孫秉熙(ソン・ビョンヒ)先生銅像など見学。

#### \*韓国の若者と交歓

タブゴル公園前でチョン・インジュンさん、カンさん、ユンさんと待ち合わせ。バスと別れ、仁寺洞(インザドン)を歩く。迷子になりそうな程の混雑振り。古美術品、民芸品、伝統茶等の店が密集。見物しながら30分程歩く。

夕食 「豆腐村」という豆腐中心の料理を出す店で、食事しつつ交歓。

金さんという22才の数学専攻の女性も仲間入り。彼女の母親は再婚して、山形県に住む。

自己紹介、質疑応答など。帰路も露店など見物、お土産など購いつつ。鐘路3街より地下鉄5号線に乗り(900W)6つ目麻浦(まぼ)へ。清潔で車両の幅広い。若者がさり気なく席を立ち譲ってくれる。階段多く大江戸線ほどではないが深い。老人は大変と思う。

ホテル帰着22:00 チョン君が送ってくれる。熟睡す。

### 第4日 曇 24度C

9:00 ホテルをチェックアウト。大きな荷物を預け、地下鉄麻浦より光化門まで。  
5号線5つ目900W。チョン君の案内。

#### \*光化門(カンファムン)

前にあるへチ(ヘテ)と称する狛犬に似た、想像上の動物の顔は、実にこっけいで面白い。火魔を防ぐという。四代王世宗がハングルを考案したという。乾清宮跡に閔妃の「明成皇后殉国崇慕碑」が立つ。太平路、街路の手入れよく広く美しい。光化門の後ろに青瓦台の屋根が、ちらりと望まれる。

#### \*景福宮光化門「宮城門開閉および守門将交代儀式」を見物。10:00~11:00

市民公園、韓国映画守れの座り込みの場あり。アメリカとの貿易自由化反対の運動も。

李舜臣銅像、亀甲船を前にハッタと睨みつけている姿。高宗即位記念堂、動物の表情が面白い。

#### \*清溪川(チョンゲチョン)復元を見物

東亜日報社屋前から韓国観光公社前の通り、清溪川路から新踏鉄橋まで5.8kmの清溪高架道路を撤去、復元した河川に沿って歩く。復元工事は2003年7月に始まり、2005年9月に完成。すべての橋の形が違い、滝あり瀬あり草地あり、清潔で美しい。広橋で上にあがる。

#### \*市庁

ソウル広場の広い芝生が美しい。市庁舎は花に囲まれている。一休み。

昼食 鈴木彰氏推薦の南浦麵屋で、冷麵を食す。トンチミ(大根塩水漬)の汁が出されたのと、大きな金だらいの様な金椀に出てきた冷麵にど肝を抜かれた。酢、辛子、キムチを入れ、好みの味にして食す。美味しい。地下鉄 2号線市庁駅より忠正路乗り替え、5号線麻浦まで。ホテルに戻り休憩。

14:25 ホテル出発。韓国物産展名品館で土産物購入。仁川空港へ。

ゲート19に16:40着。18:15 搭乗。ソウル発 18:40 大韓航空KE705。

成田着 20:38。リムジンバスに辛くも間に合う。全員無事帰宅す。

# ソウル旅行、計画から実現へ

大野 哲夫

「憲法『9条の会』調布のひろば」のメンバーでソウル旅行をしたい、と思い始めたのは、岩波講座のカン・サンジュン東大教授の4回の講義（2005年6月）を聞いたことです。戦前戦後の歴史をほとんど学んでいない自分に驚いてしまいました。アジアのこと、とくに東北アジアのことをすこしは知っていると思っていた自分がこの間のたとえば金大中の「平和統一論」などさえきちんと読んでいないことを教えられました。ちょうど、丸山さんが「8月にソウルへいきます」といわれたころでした。

一方で「6ヶ国協議」はやっと開催のめどがたったところでした。日本国内は拉致問題と絡めて「経済制裁すべき」という意見も自党内にかなり強まっていました。しかし、協議は開かれるほうに動きました。日本が協議を壊すことがなかったのには一安心です。拉致問題は、どんなにがんばっても日朝の交渉なしに解決はないし、そこには60年の複雑な歴史と利害を粘り強く紐解く努力が欠かせないのではと。拉致・経済制裁というやり方はあまりに短絡的な、と思います。

昨年8月の合宿で、丸山さんはソウルの報告をしてくれました。2006年2月15日の世話人会で日程を5月11日～14日として参加者を募ることにしました。

## ソウルのなにを見るの？

「フツウの」観光コースと違う旅

できれば南北分断の現実を見る。

板門店とソウルの人々。

日本が植民地支配した痕跡をみる。

西大門刑務所歴史観、独立記念館。

朝鮮民族の独立運動。

安重根義士記念館、独立記念館、パゴダ公園。

民主主義運動

ハンギョレ新聞社。

実行したコースと丸山さんの知人から最初にアドバ



イスいただいたコースは大きくは変わることはありませんでしたが、のちに鶴沢さんがピースボートで乗り合わせたハンギョレ新聞記者の情報があったり、大久保さんとの話し合いで韓国の青年を紹介してもらうことができ4日間の日程は楽しく充実したものになっていきました。「観光コースでない韓国」（高文研）という本の「ソウル」「ソウル近郊」「独立記念館、その周辺」に私たちのコースの大半は解説されていて、それを学びながら歩いたといってもよいかもしれません。

したがって、繁華街や、学生街、新しくできた中央博物館、光化門の中側などは初めから予定にいれることはできませんでした。

## いくらで行けるの？

新聞広告を見ると2.8万円、3.6万円などという数字が目に入ります。2月、ちょうど旅行社とそんなやり取りを始めたときソウル4日間で13万？千円でやってきた団体の人に会いました。「全食事つき、板門店ツアーつきでとてもよかった」といっていました。いっぽうでは「5万円ぐらいでないと誘えないよ」という声も聞いていました。

2ランクのホテルの見積もりがでてきたのですが、空港使用料とか石油値上げのあおりでフライトごとに追加燃料代をとって、これが結構合計すると一人1万円ちかいものでした。ツアーの広告などには欄外に虫眼鏡でやっと見えるような字で書いてあります。

朝からバスで出かけるので、ホテルの朝食つきですべての経費込みのみつもりをしてもらったのが最終的な値段となりました。朝食をつけるところでAランクホテルが値下げして何とか10万円をきることができました。このことについてはご参加の皆さんの率直な意見をお寄せいただきたいと思います。クラブツーリズムには自由旅行を企画してくれるセクションがあって、今回はその辻さんがすべての手配をしてくれました。こんなツアーも普通に売りだしてもらえるといいと思います。

## 団体で行く

10人か15人で料金が2万円ほど差がつきます。2〜3人は行きそうな感じはあっても安い旅行ではないので、そして4日ともなると。世話人の範囲でそつといけばいいと思う人もいたかもしれません。20人、30人とかになることはないでしょうが、それでも行く人ひとりひとりがなかなかわからないのです。

航空機の座席を押さえるのにさしあたり名前がいります。

広報のかいあって、17人が参加を希望されました。のち体調を崩されて石山さん、村上さんが参加できなくなって15人のソウル旅行となったのは残念でした。

## 成田発に変更

何とか羽田発着便で座席をといっていたのですが、4月18日に打ち合わせたときすでに羽田はとれないとわかっていました。

とにかく7時30分集合を8時にしてもらいましたが、京成組6人はうまく乗り継がず8時25分位になったと思います。

大韓航空機KE-706便、9時30分発は予定よりすこし早く離陸しましたが、14人は無事ゆっくり間に合って座席についていました。丸山さんは大学での仕事

を終えて、ソウルのホテルで合流です。残念ながらハンギョレ新聞社へ一緒にいくことはできません。

## 4日間をふりかえって

バスのなかでも、ハンギョレでも、韓国の青年とも、時には独立記念館などを歩いていても、平和と民主主義をお互いの手で作っていかうという気持ちの伝わった旅になったのが一番うれしいことです。

ハンギョレはむらきさんの報告が別にありますが、「なぜハンギョレにきたのか」と問いながらハンギョレの社員はなにやらうれしそうだったなと思いました。

CHON君のおかげで、光化門周辺、市庁舎前、清溪川を歩き、地下鉄にも乗りました。それぞれに朝夜の散歩をかかさずハンギョレを買い、訪問の写真が出ていないかと思ったのも愉快でした。何事もなかった、そして天候に恵まれた4日間でした。

やはり「朝鮮」について現在も過去もほとんど知識がないことを痛感させられました。

15人の仲間はみんな好奇心旺盛で、CHON君の案内で歩いた仁寺洞(インサドン)は陶磁器・書画、筆・墨・硯・の店が多く、ちょっとしたおみやげもあったようで、夜の街を目を輝かせてあるきました。よくだれもはぐれなかったものです。

朝に夜に屋台をのぞくのはおもしろいですね。アツアツの焼きたて、たい焼きのようだがやわらかくない、パリッとしていてあんずのジャムのようなものが入っている。いろんな食べ物もあっておもしろい。ホテルのまわりの店は朝遅くて(夜は遅くまで開いているでしょう)朝食はホテルにしてよかったかなと思いましたがどうでしょうか? 喫茶店はたいてい洋酒が飲める。高級スコッチは安心して飲めるがお客様のキープしたものだといって飲ませてもらえなかったりした。コーヒーを頼んだ人は不満だったらしい。

ソウルの地下鉄は便利だし、いくつめで降りるのかしっかり数えていけば結構使えると思います。次はいつ行くんでしたかね?



# ハンギョレ新聞社見学記

むらき 数子

5月11日、ソウル市内のハンギョレ新聞社を見学した。ツアーのガイドに通訳してもらいながら、女性社員に社内を案内していただき、元日本駐在特派員と労働組合役員とからお話をうかがった。

当日の見聞を、『たたかう新聞「ハンギョレ」の12年』（伊藤千尋著、岩波ブックレット、2001年1月）、『韓国現代史』（文京洙著、岩波新書、2005年12月）などを参考にまとめてみた。ハンギョレ新聞社は、2005年5月に日本・中国・韓国＝共同編集で刊行された「未来をひらく歴史—東アジア3国の近現代史」（日中韓3国共通歴史教材委員会）の韓国での版元である。

ハンギョレ新聞は、1988年5月15日に創刊した日刊新聞である。漢字を使わず、ハングル横書きの紙面は斬新だった。その設立過程も類のないものだった。韓国では、1948年の建国以来、厳しい言論統制がしかれてきた。1987年6月29日の「六月抗争」で追い込まれた盧泰愚軍事独裁政権が発した「民主化宣言」で言論の自由が保障されて、新聞の復刊・創刊、放送の



新規申請が相次いだ。その一つがハンギョレである。

民主化後も依然として「国家保安法」は残り、財閥が経営する『朝鮮日報』『中央日報』『東亜日報』などの保守言論が韓国の政治社会への絶大な影響力を維持していた。

そうした中で、ハンギョレは、1974年に言論弾圧に抵抗した「東亜日報広告事件」で解雇された記者などが中心になって、市民に出資を募り、創立した。民族の統一と民主化、民生の三つを目標とし、「権力と資本からの独立」を掲げたハンギョレに、言論の自由をきちんと実現した新聞を読みたい人々が、配当なし一株5000ウォン（当時約860円）の株券を、生活費を削って買い、創刊を支え、増資に応じて存続させてきた。伊藤千尋が描く創立の経緯は、信じがたい奇跡のドラマである。

ハンギョレの社屋に入ると、玄関ロビーの壁一面に銅版が貼ってある。創刊号などの紙面のパネルに続くのは、6万1666人の「国民株主」の名前を刻んだ69枚である。資本の介入を阻むために、一人の出資額の上限を1%とした、これは今も守られている。

明るく整然とした編集室内は、締切時間に近いはずなのに、きわめて静かだった。韓国の新聞業界でコンピュータ導入に先鞭をつけたハンギョレの編集室は、端末に向かい合う人たちがいるが、電話でかなりあう声もなく、鉛筆や紙の山もない。

民主化を掲げるハンギョレ新聞社では、社長・編集局長も社員の選挙で選ぶ。若い記者と先輩との論議も活発なようだ。職員の声は株主として、また労働組合を通じて経営に反映される仕組みを作っている。

社長とヒラとの給料差も少ない。創刊時、自由に書けることに賭けて集まった記者たちは、大手新聞社の





3分の1くらいの給料をよとした。以後、「新聞戦国時代」を生き抜き、日刊紙12紙のうち第4位、発行部数50万部という現在に至っても、給料は他社の60~70%だという。

社員のうち、女性は30%くらい、産前産後の休暇は3ヶ月、生理休暇など、母性保護は保障されている。それでも、託児施設不足や祖父母に頼れないなどで、出産年齢は30代半ばになり、子育てのために辞める女性も多いようだ。1.2と、出生率が世界最低の韓国社会の一断面なのだろう。

給料が低くても、民主的に働ける職場に、職員たちが満足感と誇りを持っているのが、ツアー一同には印象的だった。

権力の腐敗とたたかい、政治重視の紙面を作ってきたハンギョレも、創業18年の現在、経営は厳しいという。伊藤千尋記者が『たたかう新聞「ハンギョレ」の12年』を書いたのは、2000年9月、金大中政権の頃だった。以来6年、韓国社会は、若い有権者の政治的無関心が目立つと同時に、超高速インターネット加入者数世界一というインターネット先進国になった。コミュニケーションを双方向性のものとするインターネットは、ネティズン（インターネットと市民の合成語）を産み、ノムヒョン政権を生み出している。「オーマイニュース」などインターネット新聞の進出、街頭に置かれる「無代紙」との競争など、新聞は苦しく、存在意義を問われつつある。

『朝鮮日報』『中央日報』『東亜日報』の保守的な三大紙が各200万部と世論の70%を主導し、在韓米軍の維持・拡張の立場を取っているのに対し、出発以来少数派を自負してきたハンギョレは、韓国社会のタブーであった米軍駐留に発言し始めている。

お話をしてくれた韓（ハン・スンドン）さんが、特派員として日本に駐在していたのは1998年から2001



年。今も、現在進行中の日本のマスコミ動向と排外的な政治家の言行、沖縄の米軍基地、靖国や九条についてもきちんと押さえていることに感銘を受けた。

日本の現役の新聞記者が、ぽっと来た見学者にこれだけ率直に自分の意見を語るだろうか、とも思った。

ハンギョレ新聞社を見学して、権力に抵抗し、投獄や失業を経験しながら、新聞を作り続けてきた人たち、その新聞を貧者の一灯を寄せて支え続けてきた人たちの生きざまを知った。

伊藤千尋の本に名前が出てくるのは、男性ばかりだが、多くが「社長の息子の父親」と呼ばれた経験を持つとある。弾圧で失業した男に代わって、露店や行商などの零細な商売を営んで家計を担った妻＝「社長」たちがいた。儒教社会の韓国で、妻に食わせてもらっていると言にくい男が、自嘲的に「社長の息子の父親」という言葉を使ったのだという。

職場での不利益・失業・逮捕・時に命がけになる男たちの闘いが、無名の女たちの妻や母としての誇り高い生きざまに支えられていることに思いを馳せる。

自分の生きている日本社会では、権力を妄信し、「長いものには巻かれろ」「見ざる、聞かざる、話さざる」という生き方がよしとされる。どうしてこうも違うのだろうか、と問い続けている。

帰国したら、「民団・総連、歴史的和解」という見出しがテレビ・新聞に躍っていた。和解・共生に向かうアジアの中で、小泉・安倍内閣の硬直した外交で日本がますます孤立していく不安を感じる。

追記：2005年8月15日のハンギョレ新聞に「グローバル9条キャンペーン」が意見広告を載せていた。

<http://www.article-9.org/jp/koukou.html> 「世界9ヶ国、12紙に「9条」を掲載！」グローバル9条キャンペーンは、調布「憲法ひろば」で今年1月に講演してくださった、笹本潤弁護士が事務局長をつとめている日本国際法律家協会が行っているものである。



# 安重根(アンジュンゲン)のこと

任海 千衛

一日目の夕方、ソウル市内にある「安重根(アンジュンゲン) 義士記念館」に行った。

明治の時代(1909年10月26日)、伊藤博文が中国東北のハルピンで暴漢に襲われ殺された事は知っていたが、伊藤博文と朝鮮の関係も、また事件の首謀者が安重根だったこともよく知らず、旅行直前にわか勉強で初めて知っての訪問となった。

彼は、韓国では国民的英雄、愛国者として学校教育でも小学校上級生の教科書で紹介され必ず教えられると聞く。

伊藤博文は日本では首相・貴族院議長で憲法制定の中心を果たした明治の歴史に残る政治家だが、同時に、朝鮮併合につらなる保護条約(1905年)を強行した責任者で初代朝鮮総督だった。韓国人から見れば祖国を奪った張本人である。

安重根は伊藤博文をハルピンの駅頭で射殺し、その場で検挙され、満州国内の旅順刑務所で処刑された。彼は当時30歳、朝鮮の民族的悲劇を憂い、周到な計画のもとに実行したのである。記念館は広くはないが、彼の生い立ち、ハルピン駅や裁判の様子などが写真、ジオラマなどを使って展示してあった。彼は獄中で自らの思いを書にしている。漢字で書いてあるので意味は何となく分かる。一枚一枚に「大韓国人安重根」と署名し手形が押してある。彼が単なるテロリストでない事の証であり、韓国での偉大な愛国者である事を物語っている。

いくら愛国者でもピストルでの暗殺はやはり、「テロ」とはならないだろうか。今日でもイスラエルとパレスチナはお互いに目的達成のためにテロ行為を続けているが、決して国際世論は許していない。でも朝鮮の悲劇の側から見れば国民的英雄である事は疑いもないだろう。

ところで、帰国後、靖国神社と付属施設の遊就館



を見学してきた。遊就館で上映していた50分モノの映画も見てきたが、このなかでナレーターが絶叫して言う。太平洋戦争は「自存自衛」だったと。明治以降、白人のアジア植民地化の中で日本はアジア開放のために尽力した。太平洋戦争は、ABCD(アメリカ、ブリテン、チャイナ、ダッチ)包囲網の日本孤立化政策の中でやむにやまれず起こした戦争なんだと。そしてアジア諸国が日本に感謝しているコメントも紹介した。韓国朝鮮、中国で日本軍国主義が犯した犯罪はまったく紹介されない。映画を見ながら涙を流して感動していた30歳前後の若者の姿もあったが、なんとも恐ろしい事である。



# 西大門刑務所(ソテムンヒョンムイ)歴史館

三宅 征子

ああ何ということだろう、とうとう捕まってしまった。恐ろしくも憎き日帝の官憲に。

これからどうなるのだろう、私の運命は、私の家族は、頭がボーっとしているのに、胸がきりきりする。足も手もとつくに感覚を無くしている。捕まったとき、さんざん殴られたせいだ。

この車はやけに揺れる。後ろ手に縛られたままだから揺れるたびに体がねじれる。

.....

ここは何処だろう・・温かさを感じる筈の煉瓦が、灰色に塗り込められて冷え切っている。澱んだ空気に体が押し潰されそうだ。破れた服の隙間から入り込む夜の冷気に、急に体中の傷口が痛みを感じ始めた。

一列に縄に繋がれ、前のめりに引きずられていく同胞達。

鉛色に鈍くひかるカーキ色のごわごわした制服を着た、表情も見せない日帝の官憲が、屠場へ家畜を追い立てるように小突く。

.....

冷え切った床のざらざらした石が、感覚を失った足をさす。

暗く冷たく、人間の尊厳を打ち砕く狭い牢獄。寒い。



母はどうしているだろうか。父は。妹や弟は。祖母も祖父も心配しているだろう。――ああ涙が何と温かいことか。

体中が震えてきた。小刻みに、次第に激しく。いつまでも止まらない。

頬を伝った涙は、冷たくひび割れた手に、膝に、足に沁みっていく。

ああ、これがすべて夢であったなら.....

だがそれは、長い悪夢の序奏にすぎなかった。

施設は、投獄者達の脱獄を防ぎ、動静を監視する為に1923年に設置された赤煉瓦造りの塀と望楼(正門)。7棟の獄舎。入獄者達を拘束・監禁し、取り調べや拷問をした地下監房。女性だけを投獄、収監するための女性獄舎。死刑場。死刑場のすぐ横にある死刑執行後、遺体を刑務所の外にある共同墓地へ捨てる為の秘密の通路、屍軀門。等々。

私達一行は、刑務所へ入る前、正門の前で記念写真を撮った。第一日目で、午前の予定をこなした後もあり、皆疲れてはいたが、にこやかに写真に収まった。しかし、刑務所の中に入り、見学が進むにつれ口数が少なくなり、動きも鈍くなっていった。リアルな人形

## 西大門刑務所歴史館 (パンフレットより)

西大門独立公園内にあり、1998年、「祖国の独立の為に日帝の侵略に立ち向かって戦った末に、亡くなられた愛国烈士を偲び、烈士の自主独立の精神を振り返る生きた歴史教育の場」として開館。1908年に京城監獄として新築された刑務所が、西大門監獄、西大門刑務所、ソウル刑務所、ソウル教導所、ソウル拘置所、西大門拘置所と変遷を繰り返した後、歴史館へ。

「西大門刑務所は、悪名の高い日本植民地時代の代表的な弾圧機関で、数多くの独立運動家が苛酷な獄苦を味わい、日本の残酷な拷問により苦痛の中で殉国していった民族の聖地」。



と音声付きの拷問室の前では、いたたまれず目をそむけなくなった。絶叫が周囲にひびく凄惨な場面は、知らず知らず体全体がこわばっていく。つらく惨めな長い時間だった。韓国の親子連れの見学者がじっと見ている。その姿に、また、いたたまれなさを感じた。外に出ると、夕方のまだ明るい空に、おぼろなまるい月がかかっていた。



人間の心の奥底にひそむ魔性は、何によって引き出されるのだろうか。被抑圧の裏返しであるいじめ、過当競争等々、様々な場面が考えられるが、やはり最大の場面は、人が人を殺すことを目的とする戦争だろう。人は人間性を麻痺させずに人を殺すことができるのだろうか。麻痺させたとして、麻痺させながら、人殺しの作戦を立て、それを遂行することができるのだろうか。たとえ正義の為と冠したとしても、戦争が不条理に人を殺すことに変わりはない。戦争の不条理を、人はどのように受け入れるのだろうか。そういう戦争の中で、人間性を麻痺させた人間は、家族や祖国という自分を取り巻く人々の為に犠牲を払うことを厭わない崇高な精神を持った人間を前にして、たじろぐことはないのだろうか。



あの戦争を、正義の戦争と言いつのっている次期首相候補の安倍某は、たとえ一時間でも、まったく身動きの出来ない拷問室で体験してみるがいい。

究極の人間性を問われる場面の連続に、下を向いてとぼとぼと、私達はバスまで戻った。



## 板門店(パンムンジョム)の観光化と南北統一

丸山 重威

講義を終わって大学からそのまま羽田に駆けつけるという離れ業でも、今回のツアーに参加したいと思ったのは、「板門店 (Panmunjom) ツアー」に参加したか

ったからである。

1953年7月、朝鮮戦争が「休戦」になって今年で53年。小競り合いのニュースも聞かれなくなり、「統

一」へのステップを着々と踏み続けている朝鮮半島で、その現場はどうなっているのか？ かつて、軍事政権下の韓国で、「北の侵略」のショーウインドだった「トンネル」とどう違うのか、どこを誰が、なぜ、どう見せるのか、に興味があった。

ロッテホテルの前からバスが出た。このバスは「PTC (Panmunjon Travel Center)」社の「DMZ (Demilitarized Zone、非武装地帯) ツアー」専用のバス。パスポートを事前に提出、チェックを受けて乗り込む。板門店ツアーは、現在、外国人については韓国観光公社が扱っていて、PTCなど3社がこれを受け、日に2台までと限定して運行している。韓国人は統一部の管轄になっているため、申し込んでもなかなか許可されない、とも。

バスはソウルから漢江沿いに北上、まず烏頭山(オードゥサン) 統一展望台へ。臨津江が漢江と合流する地点、高麗時代から城が造られ要衝だったというこの展望台では、北朝鮮から脱出してきて、いまはこのツアー会社に雇われているという2人の女性が、「北」の生活を詳しく解説、質問に答えた。

かつて1987年に「北」を訪れたときのことを思い起こしながら、『ようやく国民みんなに白いご飯を食べさせることができるようになりました』と言っていた北朝鮮が、洪水もあったと思うが、なぜそんなにひどい状況になったのか」と聞いた私への答えは「東欧の革命で東欧との貿易が激減し、経済的に困窮したことが原因だと思う」というものだった。日本で右翼の言論人などが単純に「北」の政権を批判するのは違い、分析は冷静だった。ただ、やはり「反共法」のせいなのだろうか。「共産主義の北朝鮮は…」という言葉が随所に出た。参加者のひとりから「聞いていると、戦前の日本と全く同じ。とても共産主義ではないでしょう」の反論が出たのはまた当然だった。

展望台の外には、「北」にある先祖の墓に向かって、「南」の人たちが祈りを捧げる碑が建ち、花が添えられていた。「北」にふるさとを持つ「南」在住の人たちにとって、「墓参り」の実現は大きな課題だ。

ちょっと先の店で昼食をすませると、いよいよ「JSA」(Joint Security Area、共同警備区域)へ。



まず、DMZに入る検問があり、そこを走って、JSAに向かった。

休戦のときからずっと続いている軍事境界線は、ほぼ38度線を挟んで複雑に入り組んだ曲線だが、このラインを南北に各2キロの幅で、DMZが設けられている。武器を持ち込めない区域、というわけだ。そしてその中に、幅800メートルのJSAが設けられている。私たちもその手前でバスを降り、こんどは別のバスに乗り換えさせられて、いまの板門店・共同会議場



に向かう仕組み。最初は、米軍の拠点「キャンプ・キティー・ポーク」で解説を受け、注意事項を聞き、バッジを受け取って「宣言書」に署名した。

宣言書には「国連軍のゲストの皆様は、軍事境界線を越えて北朝鮮軍の管理する統合警備区域に立ち入ることは許されていない。また、事変・事件を予期することはできないので、国連軍、アメリカ合衆国及び大韓民国は訪問者の安全を保証することはできないし、敵の行う行動に対し、責任を負うことはできない」「訪問者は、北朝鮮側にとって、国連軍の宣伝材料となりうるような身振り、表現などを謹む」（原文のまま）などと書かれており、「私はこれを読み、理解し、そしてこの指導（指示）に従う」とされている。

JSA見学用のバスには、私たちのほか、米人だろうか、白人の男女を交えた観光客が同乗。バスには、若い米兵がガイド兼監督官として乗り込み、ジープが先導して広い道から会談場周辺に向かった。ロジャー君というこの米兵は、サングラスを掛けた警備の兵士の無表情さとは全く違って、気さくに写真を一緒に



写ったりするサービスぶりだった。

JSAの南側管理区域には、鉄筋コンクリートの「自由の家」、「平和の家」と名付けられた2つの建物があるほか、停戦ラインを挟んで青色の南側管理の建物と、茶褐色というが灰色に近い感じに塗られた北側管理の建物が7棟並んでおり、直立不動の韓国兵が警備する中、その中に案内してくれる。中はニュース写真でお馴染みの会談場。ラインをまたぐように、また直立不動の兵士がいた。

兵士はサングラスを掛け、何を聞いても、にこりともぴくとも動かず、表情は全くうかがわれない。ガイドは「写真撮影も自由です」と言い、どやどやと入った私たち観光客は、兵士と並んで写真を撮った。

警備の兵士は、私たちが入った一棟の会談場の中に3人。外にも少なくとも2人はいたから、他の棟にもいたとすると、常時少なくとも30人、三交替勤務として、この区域だけで、100人を超す兵士が警備していることになるだろう。

会談場を見下ろすところに、見学者用なのか展望台があり、小高くなっている北側の丘の上にある北朝鮮側の建物を見ることができた。北朝鮮の兵士が建物の外側に立って警備をする様子が望まれた。展望台では、写真は自由に撮れたが、指差したり、コートや上着を脱いで手に持つことは北側を刺激しかねないという理由で厳しく注意された。

バスは会談場の付近から東の方に回って、1976年8月、ポプラの木を切って問題になった「ポプラ・斧事件」の記念碑の脇を通って、「北」側にある旧板門店会談場や、北側の村々を遠望する丘の展望台へ。不思議なことに、この道筋では、車内からも写真を撮ることが禁止された。外の雑木林の中には白鷺だろうか、無数の鳥が巣をつくっていた。

DMZ-JSAツアーは、案内パンフによると、このほか、例の「南侵トンネル」や南北和解の象徴になっているという都羅（トラ）駅などをめぐるとある。

しかし、いま韓国のDMZツアーは、軍事政権時代の「反北宣伝」とは様相を変え、脱北者の案内に見るように、「北」の現実を伝える政治宣伝はあるも



の、現実をきちんと受け止め、統一への道筋を考えさせようというまじめな意図が感じられるようになっていた。33歳だというガイドの金慶美さんは、朝鮮戦争の歴史も、世界情勢の把握も実に正確だった。「何か決まった台本があるのか」と聞いてみたが、「それはない。みんな自分で考える」ということに感心した。日本の若者にこの歴史感覚がほしいと思った。

韓国観光公社のホームページを開くと、「DMZツアー」の日本語の案内が出てくる。「韓国は現在世界で唯一の分断国家」「天然記念物などの珍しい動植物が棲息し、原生林が鬱蒼と繁る非武装地帯『DMZ』は、世界でも貴重な自然と生態の残っているエリアです」と強調するこの案内では、「現在このDMZ地帯は冷戦時代最後の遺物として大きな関心を集めており、緊張と平和が共存するDMZ関連観光地などは分断国家の現実を肌で感じようという外国人観光客が数多く参加しています」と、観光客の誘致に懸命だ。事実、烏頭山の展望台を訪れた観光客は、92年から2000年までに1000万人を超えたというから、DMZそのものではないが、それはそれでかなりの人数だ。

韓国で見た英字新聞には、盧武鉉大統領が「外交的な約束にはこだわらず、いつでも、どこでも、『北』を訪問する用意がある」と語り、金大中大統領の訪問のときに約束した金正日の「南」訪問がなくても「北」を訪れ、関係を前進させたいとする姿勢を示したことが評価されていたし、金大中前大統領の「北」再訪が決まったこと、鉄道の南北縦貫の試運転が6月25日に行われることを報じていた。

試運転は延期されたが、南北の統一の「芽」は、着々と育ちつつある。板門店を積極的に見せ、開放していること、そして板門店を多くの人を知ることは、ここで再び小



競り合いが起きるようなことにはならないための保障を作っているのだろう。

観光化が進む板門店で、そんなふう考えた。

